

## 米国留学～片思いから両思いへ

Clinical Pharmacology  
Vanderbilt University Medical Center

和田 悠子  
(滋賀医科大学循環器内科)

上原記念生命科学財団の留学助成を授けていただき、米国留学が実現されたことに心から感謝している。私のポジションの条件は、“自分で資金を獲ること”だった。

現ボス・Dan との出会いは、渡米3年前に遡る。基礎科学領域での研究留学に強い憧れを抱き、留学のために臨床ときっぱり縁を切りフルタイム学生として大学院に入ったばかりの2015年、米国の学会会場で、3年後に拾ってくれるボスがいないか、留学経験者を当たっていた。順序があべこべである。そこで紹介されたのがDanで、私の一方的片思いであった。Ph. D. が内定した2017年に、「ポスドクとして雇ってほしい」と一方的告白をした結果が、冒頭の文言である。素性も知りえぬ日本人ポスドク候補生へのいささかの悪意かと、有給の邦人ポスドクたちを羨ましく横目に見ながら単身渡米したものだが、驚くなかれ、我がラボのポスドクたちは皆、グラントなりフェローシップなりの持参金を帯同していた。研究資金は潤沢にあるが、グラント獲得を条件にするところはなるほど我がボスらしい。

これから留学を希望し上原記念生命科学財団の留学助成に応募を考えている方を想定して、メッセージを込めてみる。

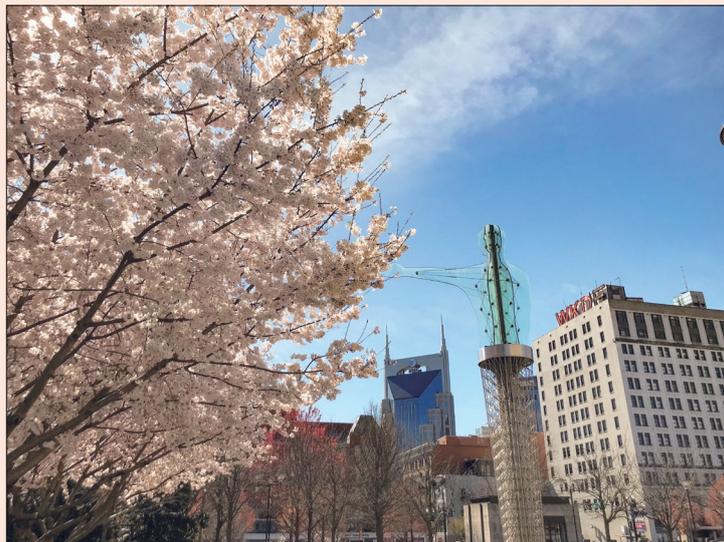
- ①「自分の代表テーマ」は、早い段階ではっきりさせておくが吉。自分が新たなテーマをスタートさせたいことをきちんとボスに訴求する。さもなければ存在意義が不明瞭なまま残酷に時間だけが過ぎる。
- ②助け合いは、そっとではなく、堂々と。他人のサポートに大きな時間を割かなくてはならない場合は、ボスに事前に相談と報告をし、プロジェクトの（新たな）一員として堂々と手伝うのが吉。そのために一時フリーズした自分の時間は、有限の留学期間から差し引かれてしまう。
- ③渡米前に、同じ大学の日本人を複数紹介してもらうことを強くお勧めする。私は無所属かつ単身で現地の知り合いなど居るべくもなかったが、遠いつてを頼って非常に親切な日本人ご一家を紹介いただき、渡米前後、言葉に尽くせないほど世話になった。渡米前から入念に生活設計を立てることで、不要な出費が数十万単位で節約できた。
- ④自分のポジションを常に意識する。留学期間の、いつまでに何が達成されないといけな

いのか、いつから次年度のことを相談するのか。「空気を読ん」だり「暗黙の了解」は、米国にはないと思うべし。あるのは建前と本音の残酷なギャップかもしれない。

助成満期後の身の振り方であるが、2年目以降もここで研究を続けられることが決まった。片思いから3年、告白して2年、同じクラスになって1年（やはり順序がおかしい）、ようやく両思いに近づいてきたように思う。

約2年前、上原記念生命科学財団への申請前に「一年のあゆみ」を通読し、どの文面にも滲む一人々々の労苦と喜びを文字通り手に取るように感じたが、こうして米国で本稿を執筆する今、改めて留学が実現したことの喜びを感じて止まない。

(2019. 3. 26受領)



ダウンタウンナッシュビルのシンボル、Batmanビルを背景に、満開の桜並木（2019年3月撮影）  
ナッシュビルにも多くの桜が植えられており、雨が少ないことも幸いし、濃い青空の下、長く桜を楽しめる